筑前續風土記

土産考 下

巻廿八

和書門	類
二九〇七〇	號
二二九	函
一二	架
二九	冊

内閣文庫	
和書	類
二九〇七〇	號
二九	冊
一七六函 七	架

内閣文庫		
番號	和	29070
冊數	29	(29)
函號	176	51

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

教部省文庫印
圖書局文庫
日本政府圖書
内 一〇一八二號

筑前國續風土記巻二十八

図書
文庫

土産考下

穀類

穀

筑紫米古より名産にて筑中肥後筑前の米殊勝れて飯として香味あり酒に釀しても味ひよし国中取上座續は備れり凡稲の品数多し名あり筆にて書しるし難し

内 一〇一八二號

早米　志摩郡波多江村より毎年六月ニ
新米を國君ニ献す其故ハ往昔の城を
築玉ふ時波多江村の山伏一人出功を能はせし
其後公是を悦ひ給ひ其年より彼山伏ニ
命して早米を毎年作り出して献
上する是嫁年之例とす彼山伏の子孫今ニ
早米を作く早米を作る田地も寛中ニ
あり織月或正月初ニ植て早米を刈ニ下して此
米を以ニ作るなり國君是を賞して毎年

米紙錫の類
赤米　大唐米とも云古民ふうかしと云米
此色赤し味わろしと以人古性古稼溝ニ餘
痛人ニ用ゆ吉文志がしと云ふ稼ニ加へ用ゆ
産のりみ出す稼ニ十年二十年も久し
きニ保てることを民用ニ利あり
粟　大小黒数多し上座郡ニ多く作る
古城米　怡土郡より出る粒大なり
蠶豆　月隈村此外下田麿出ニ作りてあり

よく栄茂して他国のものより大和芋よりよく種て
数多ある葉ニ加へて食事飢を助く民用
多利あり
眉児豆（ナンバキン） 扁豆此類也莢長く食ふ近年呉
国より渡来也
香稲 二種あり味能香よし
穇（シン）豆（キリ） 蹄豆ありて佳なるあり
豇（サヽ）豆（ケ） 短キ蔓と長キ蔓あり又蔓なくして国
にもあり其ニ黒白赤二種あり又其年々多し

きんかうけありそらしほしたるもの毎年一年不
二麦之此類
黍稷 蜀黍 玉蜀黍 粱 穇子（ヒエ） 胡麻黒白
大豆 黒大豆 赤大豆 大麦 小麦 扁豆
刀豆 豌豆 白豆 菉豆 蕎麦 等也

菜蔬類

牛蒡 遠賀郡底井郷ニ産するもの好品也
筑後ハ少し牛蒡ありて佳なり
苦（ケ）薯（イモ） 芋類ニ佳なり甚大なり世俗結也

何首烏と称し珍也 然るに蔓のものゝ如し 博多
の所よりく 津より接り又大坂より上せ命ずく
菘 京幷ニ云る數多し
蘿蔔 大根の類多し 三月大根 鶴大根
宮ノ大根 小大根 苗大根あり
水蘿蔔 京の園より出る 生にて多し
其形ちは大根を 塩にて漬 麺にしても
食も大根よりも味よし 辛し
芹 所ゝより多し 能中郡 桜井村

其産を練るよし
葱 京幷に他へ別種之よりも 薹達也
防もあり多し
壺盧 ゆうがおは帰る人 夏之宮所あり 千
郡よりもよく在る 京よりも又 若瓢
あり食ふによろし
蕪菁 山中所々に出る 秋冬比 山より出
其のうちは大は 山薬とも云ふ
薯肉 江戸中の園より 山より出る 掛生

と云は青服は又清く称いもうまかいいも云ひと
云物有食して味名國に伝ふへし

胡荽（コエントロ）　臭ひかし然共能物の悪臭を去る
葉の形種は三月ゟ八月まてよし

草石蚕（チヤウロキ）　葉は汁木ゟ下はもよく蟹の毒を去る食
すへし又飢を助く其実は子共名付毒なし

葱（キ）　本名はきなり　きは一もしの名也
又ひともしとも云其数多し　大葱有小葱
有小葱をもわけきとも云又わけきとも云

南瓜（ホウブラ）　九月に熟して熟せさるは味よからす候
色は縁よし熟すれは黄色になる久しきに堪
性よし猪肉と同しく食して吉と書に見へ
たり唐人好みて食ふ此物もと日本に渡
寛永の初めに唐より来る又日向に多く有是も
南瓜の数也

蕪菁　若き時葉を菜とし根は大成を食す葉根共
地膚　二種あり枝あるを紀伊箒とし若き葉を菜とし
食す又あしくも若葉を枝とし

田芋　五月水田の中に生ず　性冷にて　性の上
なるもして　飯に交ぜて食ふ　味苦

蘘荷　大小二種有　大なるは葉大にして紅白の蘘荷
といひ　春山に多し

芋　所々に多し　温を好む　山園に多く植え
飢を助く　民用に利有

白芋　其茎白し　大なるは其根赤白紫色
ならず　市中に多く食はるゝ　味苦能しとも
食ふ

大芋　上総郡より出る　甚大成　味又よし

蕃芋　所々に在　其茎赤し　大成食ふに宜し
塩にして市中に多く有り

雲芋　其葉蓮葉に似て其根も形雲芋に似たり
味も又雲芋に似たるなり　薯蕷之生にて　喰へば大毒
あり　是も山中に生じ

番椒（タウガラシ）　其味辛　近年甚多し　此毒積毒咽いたむと
以て多く食すれば消し　胃口を到き　魚毒鳥毒を解
ころし　血を積　癰（インミ）疾を免れ　血を治し　冷

枝錯解秋採取て切多くし諸本草にも見え人
も時珍食物本草遵生八牋唐書譜等にも
出せり
茼蒿　葉ゆでて食すに味よく性も平よし
花又見るへし
土欒兒　蔓草なり三葉あり山中所々に多し
根團子のごとし絲ありて多く連なりて根
状わかりて時は山中にも最多し數顆を成其皮し
くして蒸之を民饑の時食するなりといへり

薇　深山幽谷の陰所ところに有之緑の
多く大なり芽生て味苦し煮て食すに味甚延
又牛ゆへに食は荘子及朱子の詩傳に出たり
本草にみえずし
絲瓜　若葉時葉を煮るに沈中にて性
も又何しらぬ
鷄腸草　春月生し葉もよし
若葉　多く生し葉を生のし毒なし総
て食を云人饑之月令に記せり若葉是々

薤(ラツキヤウ) 甜菜(フダンサウ) 藜 薊 繁縷 蒲公英(タンホヽ) 莧
馬歯莧(ヌヘリヒユ) 慈姑(クワイ) 水萵苣(カハチサ) 竹筍 萍蓬艸(カハホネ)
菠薐(ハウレン)

薬品類

鶴虱(イノシリクサ) 天名精ト云葉ハ腥物を治し折傷を
以手足揉傷ニ此薬之見知テ人〳〵踏ニ付テ圓ニ出ス
多く紀伊あたりにも在之の葉あるを似ておりて葉八々色
石花 上総郡下総郡 総州郡の境圖にて子

多く紀伊利も有 葉もし 在候らし 清之ニ
先苗の先紀時食候味苦實ハ陰にも色有
多し
茯苓 所々山中より出ル 秋月の奥江州ニ
多し 白茯苓 紀白あり 紀良とし候
蓮 所々池沼にあり 多くは近年民用に利
有 根をとり 葉をとり 花を用 種は蓮実を乾
蓮肉 を在蓮 蓮花を用由
蒺(シツ)實(フキ) 所々の池にも生じ候 郡 村の池

よく売れし故に先年ある人實を蒸して用ひしが稀に
出して食用となし此邑の狩野郎に尋けるに
鄭郎申しけるは
沙参　所によりて多くあり葉は香葉又桔梗に
似たり縷にあらす根は毛少なくして細し
此如し近頃朝鮮より幕府の貢物に人参献ず
朝鮮の人参多し凡近頃朝鮮の貢
其上多くは和薬なれは人参と云ふ
其沙参生物とし本草を按するに離業古

其沙参を以人参に代用る說數本草に詳なり
人参と云ふ者は沙参之其中華にても沙参を人
参と称し後朝鮮國にも載する処の人参は倭
者沙参生物なりしきり凡日本にて人参に用る
家為多くし沙参革乳根の如きを以て直
切りて用ゆる刀ほし人参と云物洪参にも
所によりて多く味甚甘く性あしくて甚下用之
毛年上方にても中なる人参と云物其産地の郡鶴
其の中本防風之人参として用ゆるなり

羊乳根（ツルニンジン） 是も沙参の別種にて性も同じ
人参に加へ用ゆべし 所々の山中に在る蔓人参
と云ふもの也 沙参より大にして筋(?)のごとくに細く
粉有(?) 又沙参より加(?)ふる人参を本草綱目沙参の条
下にみえ(?)又より出る蔓(?)葉(?)の如くにして三葉有其
生所 人の手より出れ共 形(?)なく 吉(?)瑜(?)を用ゆべし 性去(?)
那瑞(?)梅(?)山に産する(?)白きは根なるべし
薏苡仁 薬として食ともなる又是は所有(?)ともにあり
薬店に(?)在(?)

常山（クサギ） 本草にも常山に二種あり一種は本草紀(?)
と云樹木也 是葉を刈して(?)茂(?)是を所(?)に掛(?)
ほし(?)たる人の用ゆる(?)にして食せし性もかはりて(?)一種は
葉の葉に似たり(?)小木也 与(?)ふ(?)那(?)判(?)繁(?)縫(?)石(?)
材に生ずる所々にあり
柴胡 茎を枝とし 略(?)茎葉とも(?)
龍膽草 所々山野に生ず 花も又人
しりんどうと云
牽牛子（アサガホ） 花 青白斑(?)二色あり 実黒白

有毛葉子と云又地と云
蔓荊子　所〻海辺ニ多し　性毎比も似と云
海金沙（カニクサ）　牧野ニ多し　蔓草之
天南星　二種あり民用ニ要ると云此物根を
又毒有　林中ニあり
草麻子（タウゴマ）　葉ハ地と云民用ニ益あり
毒あり
栝楼（カラスウリ）　根も横も葉も用　實も北ニ有財
治濃とも云瓜のさくらし中ニ栝楼仁と云へ

根をたゝきて汁水飛して天花粉と云
餅として食して飢饉を助く又年中ニ用
と云物も根を陰干しと云栝楼ニ似たり性同
し　唸ニ藥用ゆしと云
枸杞　唐　日本二種あり　味相似たりし
五加木　根幹葉と云又加皮と云葉を食とも
皆し性ニし　又味辛ても用ゆる加皮酒中
風ニよし
冬葵　小町ニ生と云葉子ニ用由出す

よくかへし又鰯糞肴并糠のたくひにまぜて土に雑へ
なりうらかし茶ほとなるへし

艾葉　所々田野に多し就中竈門山に
産するをよしとす伊吹山の産に似て葉大
なり凡わかきを取る時は葉のおもてをよく干し又
医書にいへるより三月三日採取して五月五日
採るをよしとすへし

流多（ルウタ）　蛮名之南蛮外医好んて用ゆ近年
此草此地にあり小なるに葉ハ麻に似て香

花実を結ふ種より生し葉ハ小をこえて
勝我朝にも好める又蕃出れとし去る茂に甘て苦味
も数あり能芽を出るも

菜蔬類

萊菔　其根も葉も二種あり大根を葉に用ゆ
能くし二年を出りて用ゆ能干にも用して
干ものへし漬にも時々用ゆ干すへし加ゝ
さらには出さに記せさるは性あし
鰕名　上總郡にて多し雑本にも実ありて又蕪

猴実なるを食すれは雖出来と如何なるへき候

柿　如此数甚多し　所常にて出来へ雑し　御

出来にて候　赤出にて候し　此にて称りは渋生

にありし　秋月山中に産出るこ称りて甚味

美月の産至て近し　さらし柿　所々に多し

梨　其品多し　消梨（アリ）　雪梨なとゝ云も有る　山中

に在し　如此候　予良郡　行江村神松出村より

御献梨至味なり　在にて至梨なとも有　神松

等と多し　上品と候

大栗　所々にあり　赤出にて候し　此作にて候

抗栗　さゝくり又志はくりと云　小栗之類　山に

甚多し　寒民是を粉用して飯に加へて食を助候

新山郷など　凶時は葉物を煮て　然ては当年まし

多く有之　秋実此を毎年如斯

懸鉤子（キイチコ）　山中所々に多し　四月に実熟候

山人持来り多売候

覆盆　葉いちこ是之　此辺にても出候へとも少

出ると云　実大にして　赤みあり

蓬虆（トキシラズイチゴ） 冬にいちごと云葉大なり

蕣田藨（アシクタシノイチゴ） 田野ニ生す五月雨の比ニ此白なる
小児好んて食す

麦苺（イチゴ） 葉ハ花も実も大なり 味よろし 実紅色之黄
園なとにも又山野にも在し 実紅より千代まて
まれニ被へし

楊梅 國中所々ニ多し 粕谷郡大谷村の枝
村梅ヶ浦と云所ニ有 一株大木之古木の由なり
一丈五尺余也 四方ニ枝繁り 其実の大なる事

梅の如し 味は甘実之

榅桲（マルメロ） 実は棗の如し 味は酸し 然も又よろし

椎 所々ニ多し 大きさと同しく二種有

楊桃（スラ） 花も実も小ふりして 豊後より 四国ニ
猿も百果の生りし 枇杷の実ニ似て 熟す

山梨子 秋月ニ熟す 其実梨子ニ似たり

山椒 所々山中ニ生す 其実まて 然して食す
他ニも生ス 葉は木枯 又冬山椒之葉大ニして
冬ニも生す 実は出来の山椒のことし 中ニハ大山椒也

いふなり食する人なりとなり
茉莄 三種有之
蜜橘 枳（クチナシ） 橙 金橘（カン） 柚 花柚 柑類
皆出所ハ和泉ニ多し 然中蜜橘ハ紀伊郡淀
川村ニ産するをよしとなす 紀伊淀川蜜橘
と云 同郡并京村ニ多し 是亦好品之 又上鳥
羽郡鳥羽村ニ大きなる橘樹有之 其樹の枝葉の
及ぶ所東西廿一間 南北八間二尺 又博多ニ
多し 案するに三代実録 仁和二年正月廿九日

此条下にいふなく 大宰府之上小橘子を例貢
する十二月廿日 以前ニ貢進 此郡ハ是より先
新羅を先にして 是を定むとあり 紀伊
いふもの（ハ）此事より 小枳を献せしにや 紀橘樹
の類なるに 凡之を以ても 枝ニ鮮ニ生せり 又
京郡及小塩 御陵上野 御郷 北辺ニ
多く産す 此種のものなり 此中ニも上品
此岸中之所之 山中之谷ニ多し 是多し 柚
其ハ不策梅中之 枯種之 此国山中ニ多し

此地の医者より是迄所亦咬𠺕吧（ジャカタラ）蜜橘受
蜜橘有橙子二種ありたいくわりかぶす蜜
華（ヘタ）のだいおしたいくまた是月頃是樹に如
ひ漸に酸気をましは肉を離て是物種に
和して用ゆる元味美き是頃称して海
おもふ所と云

庭草類

鼠麹草（バコ）　黄花さく其葉を布に入て傷に
春の末にて食ひよくは好に播ありむしろ三月
三日に餅にまぜて用ひしより古き書にあり

薊　小なるもの取ゑりて食ふ味甚よし

薊のうち又紅薊とて食ひすぐれ

吉祥草　和俗観音草ともいふ大葉麦門冬に似たり

蘿藦（ガヽイモ・ナクサ）　其葉を食ふ味甚性毒なし家に
小児食ひ此地にては此所にて多しと云

蘋菜　所々の池に生して蓴(シユン)と一類にて緒あり
葉の生れやうは蘋之葉に異なり

睡蓮　葉は荇葉に似たり葉の上は白く紫色
にして蓮の如し日中に花を開き夜は水上に
浮ひ未の時より又花縮みて水中に入故
名を睡蓮といふ

蓴菜　所々の池に生して食す葉丸く
水草にて水の中に有物を塩に漬て食
するもよし

青蒿　秋花を生し香ふし　神麹に用ゆ

黄花蒿　青蒿に似たり但葉細くして花繁
り　つよし青蒿に比し香気強し

烟草(タバコ)　諸州とも人家山谷田野物に多しは
能く産す　就中長崎郡　内浦村に能きを
出すは名を内浦烟草といふ

浜木綿(ハマユウ)　はま芭蕉と云勢州志摩の
海辺に多し花の形に似たり志摩に多り

覇王樹(タウナツ)　京都にてはさぼてんと云蛮種なり

実も有し実物之毒を枯之候

虎杖　大和の俗杖と云若葉時小児人食する
折んとて俗説に多し新らし埴し杖と云
節より笋出て鷹の治るに生ありて見えたる
紫より焼出也

蔓紫（ツルムラサキ）　若き時煮て食する実紫色之

唐豆　深山の中にある鳳尾蕉（ソテツ）に似たり細く
の若葉を茹て賞物の具とし膳の飾とす

白屋葉（クサノワラ）　是葉よく結物を作る也是尤之

知風草（チカラグサ）　所々に在り芒に似たり此草の茎
に節有是は其年若大風吹かんとすれは
其吹く中に節在是は其風吹ざる此中に在て其
秋吹くべき事に在是は九月大風吹く一節に二ツ在
は二度吹此事唐書にも多く出る日本の
俗も又称す

藁草　野に有て婦人の其葉之
香よし此葉に似たり送方にて見る人
とも惟よし

茜草（アカネ）　穂波郡若杉山鉢擂上座山中其外
所々ニ有
蒴藋（クサタツ）　俗ニ如人云馬の病を治也
草薢（トコロ）　所々ニ北山中ニ多し　鞍手郡
秋月邑ニ産也　此者大ナリ　味苦し　又さいこニ有
食也　此子播也　之ヲ樋ニ種ニ切細ニ浸ニ一夜水
ニ廣く産也　此者味苦　鞍手ニ如人云　飢饉ニ
如人し
雲實（シャケツイハラ）　毒有　葉ハさいかしのごとし　蔓を引て

本草ニ云甚毒ニ子ニ為用ニ人
搭浮草（シタ）　山中所々ニ多し　如くに　煙草也
蕭芑より久しく播ク　正月ニ芽を出し　歳首に
称之　毒有
玉瓜（タマツサ）　根を用ゆ　粉として　飢を助
天花粉ハ　実ハ瓜ニ似たり　〔illegible〕
葉ハ此葉ニ用ル　此を栝樓仁と称ス　の
如く證明之
蕺菜（ドクダミ）　俗ニ云毒だみ　以て本草ニ葉ニ

入なり駿河甲斐西中村民其根をとり飯のうへ
にて蒸し或ハ食ふ
羊蹄根（シノ） 腫物并ニ癬瘡ニ治せし一種薬丸き
根あり別ニ又蓫薚（スイダウ）ともいふ物あり饑民是を採用て
飯とし たまたま之を作る
蘡薁（イヌエビ） 国俗がらみといふ 和名をいぬゑび 蒲萄
に似たり其実をとりて酒ニ作れば性よし
其葉を干しこれんてあつかふとし いばらぎ
おくのあたりニ茶とされしも有之候

蒲 塘ニ多し 茎をとりて席とし埴と
作る事ハ蒲 茎也
巻栢（イハヒバ） 所々山中ニあり
松蘿（ヒカゲノカツラ） さるをがせとも云けれども薬ニ
蔓茅なり
菱実（ヒシミ） 池中ニ有り其実を煮て食ふ
又粉にして餅とし飢を助く
苦瓜（ツルニイナ） 此らあり実は鍾の如くにて形ハ
瓜の如し 其枝をも煮くり

松房 山中ニ生ル蔓草也未此ナシ楊枝
ト云岩の葉也ト云唐書ニも見ヘス其花あり
蘭 好事の家ニ多くうゑ文蘭師ありて植て
貴ぶ者あり二種あり

蓍(メト) 菝葜(ガメイハラ) 芭蕉 鱧腸草(タヽラヒ) 龍葵(コナスビ) 鳶尾草(ミツバキ)
酸漿草(カタバミ) 虎耳草(キジン) 蕁麻(イラ) 曼陀羅花(テウセンアサガホ) 石龍芮(ウシセリ)
毛茛(キンホウゲ) 獨脚蘭(ムリリ) 猫草 鶏腿兒草(カハラサイコ) 等あり

諸竹類

竹 大竹ハ京都ニ生と云 本ハ上方都山中ニ
産ス日本大也 小竹ハ何の所ニも多し
白竹 黒竹 斑竹 大名竹 孟宗竹 義竹
まん竹是ハ垣ニするとて也 篠竹ハ竹ニ実
有り 近年南京竹是国ニ有ル是ハ義竹
如くをさる筍ニ食ニよろしき者

群花類

牡丹 凡士大夫乃博多此家人此申花師乃

周茂叔の庭に植し牡丹好ものおほし 当時天下
に牡丹の品数を好み作るに是を栽て鉢中
好む者多し其中に紫色の花筋第一とす其上京の京都
庭にも植て見る人多し 西陣北関の紫にて紅紫の白花なと
名あり

芍薬 是亦佳品多し諸州にて培ふ凡芍
薬は薩摩より広島に至て広島は天下一と世にいふ故に寛永
比広島より出せし此国の芍薬培ふ事ありといふ

菊 是亦佳品多し 其上京には又菊七有
加へて其数多し 培ふ者は以ての外に庭前の
外に出して所々庭中に出て此花を作りて見るもの
古来より菊の紙を培ふ事を好む者多し 此れは博
多よりの菊の北名所となる 博多の菊を称して
名菊なるを諸国より称し渡れり

迎（ワウ）春（ハイ）花 冬の北東より黄色の花をさきて枝葉なく
に根生て後に土に付けは生長せし

瞿麦 中国にて培ひて山野に多し 大なり
庭に植て是は小なりて冬の花咲又紅白

石竹有洛陽花とこなつの花とも云石
竹の事なり
棣棠花（ヤマブキ） 八重なるあり一重なるあり又白
き花もあり是も八重にはなし鎌倉山吹と
て異なり花大にして若木にも多し
玉簪花（ギボウシ） 毒有二種あり一種は鋸鋒とも云
葉大なる之一種はさし紅葉にして花葉大にて小なり
白丁花 此花はよくさかんにいたし京都にてたえ
白丁花とも云 満天星也四月に小花咲也と云

二種あり一種は阿蘭陀白丁花とも云
桔梗 園中に作るもの多くは白紫有り八重一重有
里人所々山野に生ず
荊子（ハギ） 多くは紫白の間なり藪に生ず又垣などにす
其用に利あり又宮城野萩は園に植て
愛花とす之
忍ズ草 黄白数種有園中にもあり秋月花山
其野郡鴫生村山に種々の忍ズ草有
茶蘼花（ゴヤヲキ） 菊に似たるものとも云其花朱にさく也

故ニ古歌ニ寛到来鹿花事ぞと継せり
江戸ニてハ之知らんまゝと云
百合　品類多し　花葉共多有多し　葉ハ
之番白毛有白又鬼百合と云丹と云甚多し
食して味よし　白色ハ味苦し
玫瑰花（ハマナス）　此花ハ色うすくして香甚よし　是
又なり　此他ニはなくハ花ともそと云
秋海棠　此花は色まし之目ニ用ゆへし　正保年中
唐土より来る　陰地を好て日陰ニ栽る

仏桑花　花牡丹のごとし　大之千葉あり　いろいろ
此類之四月より至後く八月迄咲
庭桜　山桜桃の千葉之　実なし　花白して
色ある之もあり　淡紅なるもあり
薔薇　類多し　八重なるあり　一重なるも有　白き
有り　淡紅色あり　紅色あり　黄
白紅あり　又月季花有　毎月花咲
檀特花　葉ハ芭蕉ニ似たり　色紅之至て鮮なり
海中之蓮肉のごとし　美人蕉即是なるへし

山礬（ヂンチヤウ） 金絲桃（ビヤウヤナギ） 蜀葵 鐵色箭（ナツスイセン） 旋覆花（ヲクルマ）

木槿 品数多し 等なり

海藻類

神馬藻 鹿角菜に似て長く大にして紀州産を宜とし
至て名高し 古歌にも引ける唐泊の人ありなと詠める此地と
ありけるも 志摩郡唐泊の海濱に産す 色合
しく味よし 或は是を海藻（ホダワラ）といふ

索麪苔 宗像郡地島に多し 其外大嶋志賀嶋
姫嶋等にも生ず 索麪の如く長くして色黒
き 鹿尾菜の味有り 是を索麪とし 或は醋に和して
干乾て用也

雞冠藻 大嶋志賀嶋大相嶋其外海濱
に多し 就中地嶋その所に産するを最 味
能 和らかにて膾藻にもよし

紫苔（アマノリ） 所々の海濱に出 味甚よし 就中 毎
此りと云 出する十六嶋岩にも生す名物なり

海羅（フノリ） 所々の海濱の石に付て生す 古いふ鉏

時節莫しして食ふに味甚しくして曉し是故
小なりとも大かたは水にてしきて干し
能く乾して用ゆる者は糊にも又民用多し
末滑海藻（カチメ）　大嶋に多く産す所にて大嶋を
はしめとしての大嶋にて以て嶋民も乾し干し故
割りて汁に入て食ひ又用ゆる
海藻（モヅク）　嶋之海濱に多し　是其時に藻の
新にて生取りおしていて甚宜し
河藻（カハモヅク）　所之小流にあり能中鴨郡之経

村の小川井村の松井川　加戸郡右内川
子良郡餘笠川に多し　海藻に似て毛を
黒く糸を浸して如くあり又葉すくなし
茎なくて其味ヒ吉経小鹿殊猶しあるを
採りして之病人食ふ之は此藻は水中
向て流して川水として産し又は海藻に
似としても藻の類を是は此に熟し
石帆（ウミセン）　大嶋之所々にあり黒黄赤三種共
足物なり

海苔（ノリ） 海松（ミル） 鶏冠苔（トサカ） 鹿尾菜（ヒヂキ） 凝草（コヽロフト）
海髪（ナキス）毒有り不可食 於期苔（タコ） 龍鬚菜（モヽラモ） 等あり

樹木類

薪炭 国中薪取山在て何者もかたく雑し
福岡博多の辺へ出すハ早良郡の奥
石釜 曲淵 脇山 内野 小笠木 皆早良郡 飯場 那珂
郡岩戸の枝村 粕屋郡 篠栗 萩尾 久原 若杉
須恵 穂波郡 八木山 内住 等之 炭も焼所も
亦同し 炭ハ薪ハ上郡 大鳥山より出る事多く
出川 秋月には薪炭殊に多し 江川より出る
炭多き也
材木 材木の多くして名あるは上座郡 佐田山
宝満山 并 一の坂 鞍手郡 犬鳴山 大賀畑
山 穂波郡 相田山 夜須郡 秋月山 嘉麻郡 言延
山 早良郡 曲淵山等之 近年ハ多く伐て材
木となし 断ことなきよしなん
松 国中北山には多松を産し 殊に中小松原
は粕屋の北 凡五所あり 就中 生松原 松

能ことを珍とす跡をして至る所高し吉敷郡(?)に家
の東赤都濃郡花見松あり赤く広し 近代島
銅并之赤村の小石紫赤赤く又広見志当より
築寄にはさ中り 又 鵯縣山より松樹数
かりにありて並み板をかつぬゐなをたゐて
絶松もし 海上及肆敷北観賞せして其数
販き此外五種書あり
萱葉 松の多き所屋紫赤多くしそく
薪とし民の利用多し 又海上にも出す難

蘇鉄同し
茶 宋出岩窟大蟲寺化茶湯記によりて建
仁寺開山千光国師栂尾明恵上人同船して
入宋し同時に帰朝せり 時に茶実を持来
りて筑前国背振山に植へて是を岩上茶
と云 明恵上人是を栂尾に移し 又宇治に移せり
千光国師入宋より前既によりかし此後に至
り見るに元日本に茶を植し事當国を始と
いひかしこ背振の山上に植しにや 是も皆

摂山の葉藤松尾村ニ多く産せり又梅尾村の
下那珂郡又箱山秋月北江川上座の山中
ニも多く生せり

杉　上座郡小石原村の山中ニ産せり杉の
枝葉大ニして長さ五団ニ余り節多く無し
宗像郡之俗ニ杉ありといふ其宿にて見る
爰之杉を伐り又橋とせしに強くして能甚
木理甚よきにより家ニ桶樽とするに堪へ又
英彦山ニも多し

綾杉　粕屋郡香椎村　神功皇后御廟の前
にあり長頼ニも後の世まで枝葉常の杉しと云
ふ事あり　香椎社の条下ニ委し

梅　白梅　紅梅　一重　八重　諸品多し　城下
ニ梅十種あり絶緑梅已梅さかりにて花実大き
其大なる也其丈多し又箇梅あり其の実も
小し太宰府等の紅梅よりも大なる事世ニ類
なし其盛なる時は其見物ととなしむ

桃　紅桃　白桃　金桃　千葉桃　緋桃　八重

桃　山ニも不多し　油桃と云物あり　実無毛也
桃ニ似たり　一種桃あり　実八重なりて当年
花咲

木芙蓉　形白草葉ニ紫あり　秋花咲　蓮
ニ似たり　故ニ木芙蓉と云

黄楊木　所々在所山ニ多し　用て櫛ニ
琵琶の撥ニ良　又梳あり　是も櫛ニすへし
此木ニ似たる小木あり　是をこつけと云　小木ニして
枝曲也　枝用ニならし　立花の具ニ用ひる

斉景有月

安石榴　酸と甘と両種有　又色紅白紫ニも有
有実ニ多し

欅（ケヤキ）　上産郡山中ニ大木有　又欅ニ一類之物（杞）

楠　国中所々ニ在　大木多し　云古キ数
寒ニ及ひ候木多し　大高郡小倉村柁平
の殿北側ニ在　楠国中第一の大木也　大抱
其在所方二つ内ニ在　此木ニ張々　張郡ニ
杉あり　以前ハ大木あり　又都賀郡宇英

丈ニ余ル大楠あり佐嘉郡山家村ニ仏道木あり
梻加屋あるへし一名木之榧の木ニ似たり
実ハ渋あり
椒 葉ハ木ニ似て実ハ食ふへし又楮ニ
似たり宗像郡大島ニあり
鳳尾蕉(ソテツ) 所々園中ニあり一種番蕉(リヤウキウソテツ)あり雄
なるも一根なり
櫁(シキミ) 是莽草あり所々山中ニ多し抹香トス
桄中ニ早良郡西油山村の岩人多く生せり深

毒あり食すへからず
塩麩木(ヌルデ) 漆ニ似て葉縁ニ鋸歯なし又むし北斗
生り物ハそれニ似たり
椋子木(ムク) 其実秋熟して味甘し小児好んて
食ふ其葉を用ひて木賊のかハりニ物を磨(トク)く
紫薇花 百日紅と云六七月より八九月まて
花咲て其木ニ猿すへりと云
海棠 二種あり海棠ハ実有食すへし花
花なし唐のハいふりと云ふ唐より来し垂絲海棠

山海棠　是も宜なし花も常盤なり此も池中郡
よあ原本なれは山中にあり
接骨（ニワトコ）　二種あり共にその花紀の如く枝に節有
是亦の接骨之鬼箭れ云秋の丹葉は月経に
有る事あり紫せは一種有しして其臭みかれ之
石南花　山中所々にある銭中那珂郡南高宮村
の上乃山に多くある処にはえるしかるは
山茱萸（ミツフ）　山中小なり木なり食るは其葉の在
二月頃に中にして葉とりして食るは味旨し
飢を凌ぐ文婦しらると云物也飢饉然たるへく
楤木（タラノキ）　山中にあり針多くして如其所へ用
して食るは味よろし毒なし
罌子桐（アブラギリ）　桐の葉に似たり其実をとりて油とし
燈油に用る此漆として質を塗る法也
を摘て利る実は毒也食ること不宜
とて此せんなりし
海桐（イヌキリ）　諸の郡池河内にも其枝を植て
扇子桐なり

歴（クヌギ） 薪として火爐に用

木犀 嵯峨の土地に大木所々ニ在村郷にも
ありと云へし

芽栗（ブナノキ） 竈門山に有也葉ハ栗のことく実も
椎に似たり

辛夷（コブシ） 正二月に白花開く赤き実なる大木也

接骨木（ニハトコ・タヅノキ） 木ハ川木に似たり葉ハ蒴藋の如し

女貞 黒き実なり称ハことにあらす之

冬青 二種あり一種ハ赤き実なり一ハ黒きか之 一種ハ赤く

又一種と云ハ赤き実なり梢を切て籬とす是ハ枝
立而常緑

檍 あをき紀伊州にて云葉ハ大にして冬の
木の実あり冬も青し葉ハ枝に付と云葉ハ外
添ニ用白木ニ多し鳥の弓紋の如し

空木（ウツキ） 花ハ卯の花と云卯月ニ咲茶人も多く
細工ニ用あり

蕈栭類

岩蕈　諸県郡竈門山彼杵郡古所山中ニ産
ス大岩ニ付テ生ス其形木耳ニ似テ
ウラハ黒ミアリ

麦蕈　松露ニ似タリ是白砂の地ニ松葉の落
チテ生ス其形ハ丸ク色白ク香味
ヨシ又黄白二種有白ヲ上品トス
性平ニシテ毒ナシ
但味ニシテ茄ヨリ劣レ濃ニ煮レハ久シク持

其外當国五所毒茸及志摩郡小倉尾柏原郡
那多浦の毒茸多く産ス此茸ハ木ニ生ス毒林多
キ所ニ依国ニ多シ毒ニ二種有リ葉秋ニ至
時ハ生の毒茸の間ニ生ス先産ス山上の毒木ニも
隔テ生ス以テ之ヲ毒有食ヘカラス

金蕈　八九月山頂ニ産ス其形毒茸ニ似テ茎黄
色ニシテ以テ紀ニシ極テ食フナリ
林材生所山上の地先ニ生ス其松ノ葉ニ味アリ之
毒ナシ

〔ヘニタケ〕紅菰　其色蛋子の如し毒有し所々山野ニ
産ス
粉蕈　八九月山野ニ多く生ス其色深緑ニして
洞有のことし食すれハ腫脹物出して痛
むし毒有し
〔シイタケ〕香蕈　所々深山北中又ハ林中北木ニ
生ずるにて生ス
梅蕈　柳ニ生ス
針蕈　春月京都ニ生ス其形大針のことく

先キ寸能早り鶴色之味ハ鼠蕈ニ似たり
平蕈　山中の木ニ生ス
舞蕈　所々山中北中ニ生ス
鼠蕈　所々山野ニ生ス其色鼠の毛
のことし其形大なるハ針ニ似たり又白色黄色
有皆毒なし
〔シメジ〕蘿菌　粉尾郡宇治及山城京
都ノ近方ニ多く有り一種木ニ似たる黄色
色悪き毒キ者ハ毒有り不可食之

木茸　所々山中ニ多し

松蕈　怡土郡高祖山ニ良郡荒平山糟屋郡
若杉山太祖山鞍手郡六ケ岳山穂波郡大隈
山夜須郡秋月山嘉麻郡提子山下座郡御笠郡村
稗田村志摩郡二塚村其外ニも所々の山ニも
産せり

土栗　松露のことにて土中ニ出る也又栗ニ
似たり二月四月比多生す煮て食す味木茸の
如し是等類の数も山中ニ生す

莧（ヒユ）　白莧あり赤莧あり紫莧有白莧ニ似
上品とす早歳ニ花滋生す

木天蓼（マタヽビ）　所々深山ニ多し其実秋初ニ生
二月ニ下ニ花さき実ハ下ニなる長し

萵苣　白萵苣あり赤萵苣あり苦ちさ有
白きハ葉大キク又六月ニ至久しく
さかりあり味苦し

独活　所々山中ニ生す秋月山中ニ生する
物苞大なり大之文深く食す根を

何人も取りして味甚だ佳にて横根と云ものあり紫萁
土中に紫芽独活と云長くものを独活と
云ふ是を取りて何人も取りて用ひて食ふ

蕨

国中所々の山に生ず白郡別鳩に
然るに須郡猪月邑より出る蕨大にして
味甚だ佳也年々甚根を取り粉となりて
食ふ何も貧民共甚だ蕨を取山中に入りて蕨根を
掘り一月平均に蕨根を掘り餅となして食
し飢を助く又糊にして蕨を取りにあらし

圖書局文庫

于時安永八己亥暦首夏末四月寫之畢

国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan